

【研究背景／目的】

私は、小学4年生から大学4年まで、12年間卓球に関わってきた。また、大学では卓球界のトップの選手が集う早稲田大学卓球部に所属することができ、卓球の技術や試合運び、そして、精神面のコントロール方法などを、素晴らしい環境で学び成長させることができた。

この卓球一色の私の人生を通して、私は次第に卓球が持つ、スポーツの枠を超えた可能性を探索したくなっていた。また、今後の日本卓球がどうすれば現在の卓球王国である中国に勝てるのかも、改めて考える機会を作りたい。

そこで論文のメインの題材に選んだのが、卓球がまさにスポーツ界のみならず政治を動かした瞬間を捉えている、ピンポン外交である。また、ピンポン外交で他国と関係を深めていた当時の日本卓球が、世界一に輝いていたという事実も、私の興味をそそるものであった。

論文内では、中国の動向に目を向けつつ、卓球が国同士の関係を構築していった真実を深めるためにも、アメリカや台湾についても言及している。

私は、歴史の中にこそ、今後の日本卓球を左右する情報が隠されていると判断しており、このピンポン外交の歴史と、現早稲田大学卓球部員(日本代表クラス)の経験談を結びつけながら、今後の日本卓球躍進の力になりたいと考える。

様々な情報が入り混じっている現在だからこそ、改めて多くの卓球人に卓球の歴史を確認してもらいたい。そして、卓球の素晴らしさを改めて感じ、日本卓球にはまだまだ明るい未来が待っていることを感じてもらいたい。

【研究方法／研究構成】

研究方法は、各種のピンポン外交に関する論文、早稲田大学が発行している卓球人という冊子、朝日新聞、そして中日新聞を中心に、ピンポン外交の歴史について詳細にまとめている。また、早稲田大学スポーツ科学部の教授を務めている森武先生と、現役卓球部員の経験談も踏まえることで、ピンポン外交や今後の日本の卓球の変遷について、より内容を深めたものになっている。

研究構成については、第1章では本論文の構成

と進め方の確認、そして卓球が日本と中国を結びつける上で、非常に交流を持ちやすいスポーツであった事を記している。

第2章では、ピンポン外交の基礎知識として知っておいてもらいたいことを書いている。例えば、国際卓球連盟(ITTF)やモンタギュー精神について、日本の台頭した時代、中得と台湾の「2つの中国」問題についてなどである。また、この章では、森武先生の談話を取り入れた日中、日台の交流についても述べている。

第3章では、ピンポン外交に人生をかけた後藤鉦二氏の動きを中心に、ピンポン外交における大きな柱の大会となった名古屋世界選手権について、そして、大会後の中米の歩み寄りについても触れている。この章が最もピンポン外交において重要なポイントである。

第4章では、名古屋大会後の中国と台湾の動向を述べており、第5章では、ピンポン外交の歴史を振り返る意味も込めて、ピンポン外交の意義と問題点を書かせてもらった。

第6章では、それまで述べてきたピンポン外交を踏まえて、中国と日本とのスポーツに対する捉え方の違い、卓球の技術の差、そして、今後日本が中国に勝ち、再び世界一の座に上るための方法論を書いた。

あとは、会談紀要や論文に参考した文献などを載せており、最後はまとめという形で論文を振り返りまとめている。

【結果／考察】

ピンポン外交というのは、国の代表者と代表者が関係してこそ成り立つものであり、効果を発揮する。だからこそ、国レベルで取り組むべきものであると感じた。また、国同士の繋がりを深められるという点でも、親善試合などを定期的に開催でき、お互いの卓球のレベルを高め合うことができるメリットもある。日本の卓球を再び世界に誇れるスポーツにするためにも、卓球人は改めてピンポン外交を見直すべきである。そうすれば、日本卓球界の未来も明るいものになると、私は確信している。